

「心の目」

(ルカによる福音書24:36-48)

今日の福音で、ご復活の主イエスは弟子たちの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と声をかけました。先週のヨハネによる福音書と同じセリフですが、今日はルカによる福音書です。「あなたがたに平和があるように」と呼びかけられた弟子たちは、恐れおののきます。亡霊だと思ったからです。その弟子たちに主イエスは「なぜうろたえ」「どうして心に疑いを起こすのか」と語りかけます。疑いや恐れにとらわれた人間には、目の前で起こっている神の業を見ることができないからです。主イエスはその疑いや恐れを、彼らとの交わりのなかで取り除いていきます。

主イエスは彼らの前で手足の傷を見せました。そしてかつてのように、共に食事をしました。けれども、彼らはまだ目の前の主イエスが本当に復活した、ということ信じることができません。目に見える証拠、物的証拠をどんなに見せられても、恐れや疑いに囚われた人間には、神の業を見ることはできないのです。だからこそ、主イエスはいよいよ決定的な働きかけを弟子たちになさいました。彼らの「心の目」を開かれたのです。

「心の目」が開かれなければ、人は真理を見ることができません。これは信仰の真実だと思います。わたしたちは同じ世界に生きていながら、神さまがいる世界を見ている人もいれば、見えていない人もいます。たとえ目の前で神の業がなされていても、聖霊が吹き荒れていても、「心の目」が開かれていなければそれに気付くことが出来ないのです。聖書の話はまさにそのことを繰り返し語ります。たとえば今日の旧約聖書で「隅の親石」

という言葉がありました。クリスチャンの多くはそれを新約聖書と結びつけて、イエス様を連想することでしょう。しかし、信仰の目でいない方には、それは「？」に過ぎません。主イエスを真の救い主として見る事ができた人間もいれば、そうでない人間もいる。その違いは何か？それは「心の目」が開かれているかどうかです。

わたしたちの心の目を閉ざす、阻害するものは何でしょうか。疑い、恐れ、嫉妬心、虚栄心、罪責感、自分の欲望だけを満たそうとする思い、諦め…。こういうあらゆる思いが心の目を遮ります。しかし、このような力はとても強く、人間を、自分自身を支配してしまいます。わたしたちは日々、そういう力から身を守るために、グッと力を込めて拳を握りしめて生きています。そうしないと、他者との（そして自分自身の「こだわり」との）せめぎあいの中で、自分自身を守ることが出来ないからです。そして、意識的にも無意識的にも、握りしめることにばかり集中しているから、心の目が鈍くなってしまうのです。そればかりか、心の目が見えるようになって自分の大切なものを神に差し出さなければならなくなるとは困るから、心の目を開かないでいられるように、何とかやり過ごそうとすらしてしまっているのかもしれない。そういうなかで、他者に対して、現実に対して、そして神さまに対して、わたしたちは心の目を閉ざしたまま生きています。

けれども、主イエスは心の目を開くように働きかけておられます。わたしたちの心の目を遮るすべてのものを取り除き、心の目を開こうとなさるのです。心の目が開かれたところにこそ、わたしたちが握りしめ、守ろうとしている価値観、世界よりもはるかに素晴らしい世界が広がっているからです。主イエスは、わたしたちを恐怖から解放するため

に、ご復活によって、死という「終わりの象徴」に勝利され、目をつぶってしまうような現実の先にも必ず希望が備えられていることを示してくださいました。わたしたちを疑いから解放するために、裏切った弟子たちに現れ、どんな罪も赦されることを示してくださいました。そして、主イエスはわたしたちを「うろたえ」させ、「心に疑いを起こす」あらゆるものから解放するために、その命のすべてをささげてくださいました。それはすべて、わたしたちの心の目を塞いでしまうものを取り除くためです。だからこそ、ご復活の主イエスはすぐに弟子たちの前に現れ、「心の目」を開いたのです。もう「心の目」を開いても大丈夫だ、心の目を塞ぐ恐怖や頑なさから開放されても安心して生きることが出来る。そうして、主イエスの側からわたしたちのところに來てくださいるのです。

しかし、それでもなお頑ななわたしたちです。だからこそわたしたちは、主イエスが命をささげられた姿、十字架上の主イエスを見つめ続けなければなりません。十字架上の主イエスの両腕は開かれています。主イエス自身が大きく手を広げて、神さまにご自分を開いておられるのです。そして、その開かれた腕はわたしたちを抱き、包み込むためにこそ開かれています。疑い、恐れの中かで、グッと拳を握りしめ、心の目を閉ざしているわたしたちを迎え、神さまにある安心へ、深い深い愛へ招いて下さっているのです。わたしたちはその愛に触れる時、心の目は開かれ主イエスによる救い、絶望の先の希望までも共に歩んでくださる本当の救い主と出会うことができるのです。

東京聖テモテ教会の週報に掲げ続けられている言葉があります。

「私たちは礼拝を大切にします　そしてすべての方を招き入れ、共に歩いていきま

す」

これは、東京聖テモテ教会のミッション・ステートメントとも言える言葉です。そして、同時にすべての教会に課せられたミッションです。しかし、どうしたら礼拝を大切にできるでしょうか。どうしたらすべての人を招き入れることができるでしょうか。他者と共に歩むことができるでしょうか。それは、誰よりも主イエスが手を開いて迎えてくださっているからできることです。わたしたちのことをそのみ腕で抱き、心の目を開いてくださるからこそ、わたしたちはその愛をいただいたものとして、心から感謝と賛美の礼拝を捧げることができる。その愛を知るからこそ、すべての人を喜んでこの愛の交わりに招き入れることができる。その愛を知り、恐れを取り除いていただくからこそ、他者と共に歩むことができる。それが、心の目を開かれたわたしたちクリスチャンであり、東京聖テモテ教会が掲げている教会としての姿勢です。

安心して、握りしめているものを手放したいと思います。難しいことです。けれども、主イエスは今日も腕を大きく開いてわたしたちを迎えてくださっています。だから、安心して、今日も主のみ腕に抱かれ、心の目を開いていただき、心からの感謝と賛美をこの礼拝でおささげしてまいりましょう。